

月刊

AMDA

国際協力

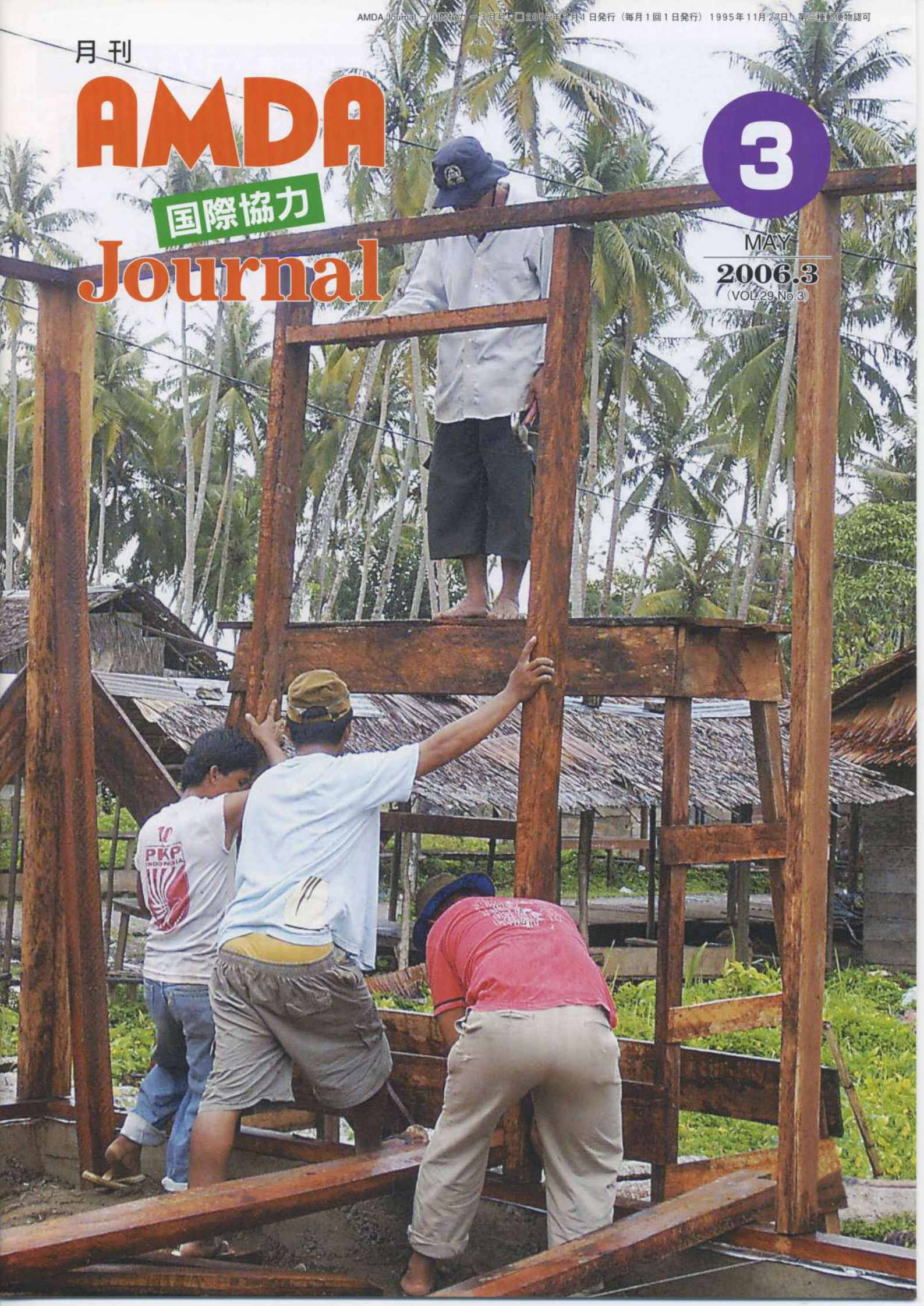
Journal

3

MAY

2006.3

(VOL.29, No.3)



インドネシア・ニアス島 緊急簡易家屋復興支援プロジェクト



被災地の状況
テント生活を続ける村民



村落復興委員会による整地作業
被害状況の確認と村民との集会



スタッフ間のワークショップ
基礎工事



完成したモデルシエルター
モデルシエルター（簡易家屋）建設



AMDA

国際協力
Journal

2006
3月号

◇
CONTENTS



ニアス島復興委員会のメンバー

◇インドネシア	
ニアス島緊急復興支援プロジェクト特集	1
◇寄付者一覧	10
◇国際協力ひろば	11
◇AMDA 派遣者報告会より	12

表紙の写真：ニアス島緊急簡易家屋復興支援プロジェクト

ニアス島の雲行き

AMDA ニアス 鈴木 俊介

本誌上でこれまでに2度簡単にご紹介させて頂いたニアス島（簡易家屋復興支援）事業は、9月中旬にUNHCRと契約締結に至り、10月初旬より実質的な活動を開始している。数えて丸4ヶ月、当初はこれでもかというほどの大雨に打たれながら事業の成り行きに不安を覚えた。現在は雨季も終わり穏やかな日々が続いている。小高い丘から見える大海原は日増しに青色を鮮明にし、この地がスマトラ沖に浮かぶ小さな島であることを否が応でも実感することができる。

インドネシアは大国である。一般的に人々のプライドも高い。どこへ出掛けてもその土地その土地の豊かな文化がある。ニアスもその例外ではなく、独特の文化がある。特殊な建築技術を持ち、固有の言語、伝統行事、舞踊や唄がある。島の南部に伝わる「石跳び」という忍者顔負けの高飛び術は特に有名である。一方、古くからオランダやドイツの宣教師が入っていたため、他の地域と比較してキリスト教色が強いのがニアスの特徴である。カトリックとプロテスタントの両方が並存するが、「クリスチャン（キリスト教徒）」という排他

的にプロテスタント教徒を示し、カトリック教徒と区別している点が面白い。

一昨年の12月に起きた津波と昨年3月に起きた地震による被害を受けるまで、この島を訪れる外国人は「通の」サーファーや教会関係者くらいしかいな



かった。しかもサーファーは島の南側から西側の海岸線を訪れるため、島の東側に位置するグメンシトリという商業の中心地を訪れる外国人はごく僅かであった。災い転じて福となっているのかどうか判りかねるが、国連関係者や国際NGOの職員が駐在し、かつ復興支援活動に活用するため、現地市場か

ら様々な物品を調達しており、活況を呈していると言えなくもない。もちろん、そのことにより利益を得ている人々はごく少数の商売人であることは言うまでもない。

街を歩いていると興味深いことに気付くことがある。例えば、我々がお世話になっている一般庶民を対象にした食堂は、ほぼ例外なくイスラム教徒の家族が経営している。島民の7割以上がキリスト教徒（ここではカトリック教徒含む）であるから、キリスト教徒の家族が運営する食堂があっても良いと思うのだが。宗教ごとの分業が確立しているのか、少し探ってみると面白い発見があるかもしれない。ところで、我々AMDAの現地スタッフにも興味深い傾向が見られる。どちらかという知的側面の付加価値を生み出す事務職へ応募してきた候補者の9割以上がキリスト教徒である。一方、運転手や土木指導員など、技術系、手に職、汗を流すタイプの職種に応募してきた候補者の6割以上がイスラム教徒である。こうした傾向は、宗教別の人口比率と明らかに相反してい



村への交通アクセスはボート



村の住民へのプレゼンテーション

るのである。彼らの教育環境が作り出すものなのか、宗教の教えによるものなのか、それとも文化的な影響を受けてのものなのか、もう少し観察してみたいと思う。

ニアスの人々は、想像していた以上にコスモポリタンな性格を有している。島国根性、排他的な側面はあまり見られない。スタッフのみならず、村の人々も、外国人に対して決して卑屈にならない。礼を失することとフレンドリーであることとの境界線を明確にすることは時に困難であるが、例えば業務上一定の仕事を現地の職員に任せる場合、仮に部下・上司という関係であっても、何でも言い合える仲である方が都合が良い場合が多い。

さて前置きが長くなったが、我々の仕事は、富士登山に例えるとまだ5合目に向かうバスの中にあるようなものである。簡易家屋建設のための準備作業を行っている段階である。この事業の何が困難かという、モニタリングやロジスティクス上の課題もさることながら、「住民の、住民による、住民のための建設」を推進する途上で直面せざるを得ない種々の問題を、我々ではなく、住民に解決してもらおうプロセスにある。大工を雇い入れ、機械的に建設していくのではなく、住民が建設工程や大工技術を学び、自らの手で自己の簡易家屋を建設していくという、一面において夢のようなプロセスである。それがどれだけ現実味を帯びるかは、我々スタッフの力量にかかっている。俗にこうした能力をファシリテ

ション技術と呼ぶが、精神的な格闘技と言っても良い。住民と向き合う現地職員が重圧に耐えかね、妥協し易きに流れると負けである。少々開発学的見地からのコメントになるが、住民参加には常に機会コストの弁済方法を巡る駆け引きが包含されている。住民が無償で建設に従事する間、誰が彼らの生活費を負担するのか。表層的なボランティアイズムは通用しない。事業側がそれを負担すればするだけ、住民の当事者意識と結果に対する責任感の度合いは薄れていく。

事業活動を通じて誰が得をするのか、そして誰が損をするのか、またどの村がどれだけ得をするのか、経済的、政治的な側面だけではなく、宗教上の影響などについても考えていかねばならない。事業はその進捗状況に応じて地域に変化をもたらす。すべてが



正の効果であれば良いが、負の効果ももたらす。その程度を予測し、事前に対応策を立てておくことが重要である。そこに社会的、文化人類学的、またはジェンダーなどに関する考察が必要になる。適切な予防策を講じることができかどうか、事業を成功に導くか否かを決定すると言っても良い。

雨季でもないのに、今ニアス島を厚い雲が覆っている。すでに述べたが、UNHCRによる材木の調達大幅に遅延している。12月末には到着する予定であったカリマンタン産材木の船積みさらに遅れ、最初の到着は2月の中旬以降の予定となった。入札制度を通じて最初の契約者となった供給元の出荷能力に危機感を持ったUNHCRは、その後出荷先をスラバヤにも求め、すでに3つの調達先と契約を交すことになった。問題は、それらの材木が一度に到着した場合、ニアス島の小さな船着場と資材置場が大混乱に陥るのではないか、ということである。さらに、仮に水際における問題が解決されたとしても、輸送手段の制約から、今度は各NGOが事業地へ木材を搬送することができるのか、という大きな懸念を我々は抱えている。

厚い雲を割って一筋の光が差し込むか否か、我々は精一杯の準備を行い、後は天に祈るしかない。否、一神教の信者である彼ら住民はこう言うであろう。「神の御心のままに。」

←緊急簡易家屋復興支援事業
オペレーション事務所

モニタリングの役割、私の所感、そして体験

AMDA ニアス 佐伯 伸孝

2004年末の大津波、そして2005年3月の大地震による被災地となったスマトラ沖の孤島「ニアス島」で、私は昨年10月よりモニタリングオフィサーとして勤務しています。併せて千名を超える死傷者を出した両災害の傷跡は、未だ街中の至る所に見られます。特に地震による被害の大きかった島一番の街のマーケット周辺では、見渡すかぎりがれきの山といった場所がいくつもあり、瓦解した家屋の間に潜むようにテントを張ったり小屋を建てたりして暮らしている人が今も大勢います。このほか避難民用のキャンプ地に住む人々、親戚の家に身を寄せて暮らす人々など、合わせて8万人以上が1年あまりたった現在でも(!)避難生活を強いられており、再建すべき住宅数は全島で最大2万軒以上といわれています。

こうした状況を受けて国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) は、島内で住宅建設の援助をしている国際/現地 NGO にとって最大の課題であった木材の供給を支援することを

決定しました。この決定にともない AMDA は UNHCR と業務委託契約を結び、木材供給におけるモニタリング (監視)、および同島南東部の村々における住宅建設・技術支援を担うことになりました。私は前者のモニタリングの担当者として、UNHCR から各 NGO に供給された木材が適正に使用されているかどうかを監視する業務を行っています。

この監視業務を通して建築資材の横流し等不正行為の発生する余地をなくすことにより、援助物資が適切に被災者の手に届くシステムを守っているのだという自負が、私たちモニタリングチームの活動力の源泉です。

現在までに、私たちは機能的なモニタリング方法の構築、および木材提供

を受ける全 NGO の建設現場への予備的な監査をすませ、いつ木材が到着しても対応できる体制でいます。モニタリングにおいては各関係団体との良好な関係づくりが非常に重要になりますが、監視するという「体制側」の立場をふまえ、また公平に客観的な視点を維持しつつ、そして不正行為は許すまじとの正義感を持ちながら、「これらの尊敬すべき活動を展開している NGO のために、なにか自分たちが役立てることはないか」という気持ちで接するのが大切ではないかと個人的に考えています。こうした「尊敬と感謝の気持ち」をもって接するとき、モニ



タリングに関連した様々な情報をシェアしてくれる各団体の担当者も、心広く受け入れてくれるような気がします。木材の調達に関する種々の問題のため、各団体への木材の供給が大幅に遅延している現在、UNHCR に対しては多くの不満が鬱積していますが、その両者の間に位置し、それぞれと良好な関係を持つ私たちのユニットはそのお互いの良い関係を維持し、この全住宅建設のプロジェクトが成功裏に終わるよう、役に立てればと考えています。

今回のモニタリングの仕事は私にとっては初めてのフィールド勤務であり、「途上国」での暮らしとなります。仕事から広島県ほどの広さのニアス島を文字通り東奔西走し、様々な「途上国」の生活を垣間見ました。中でも特

に印象深いのが、ある村への道中、往復4時間の泥沼の道を歩いた経験です。その道は、雨期の間は常に泥であふれた道路だそうで、平均深度約20cm、陸地といえば泥の海に浮かぶ“島”のように点在し、その“海”は深いところで7-80cmにもなります。はじめは長靴を履いていましたが、沼道が本格化するにつれて長靴では足を取られて歩けないとわかり、裸足になりました。そして私は泥道の行軍というのは非常にタフなものだと学びました。第一に泥の下には、大石小石、棒切れ小枝と、踏んで痛い思いをするものが多くあり、また“水面下”にな

があるのか踏んでみるまで全くわからないのです。特に草を刈った跡などを踏むと、斜めに突き出た草の茎が足の皮を破ったりするので、感染症を恐れたものです。また非常に滑りやすいため、足の筋肉を常に緊張させて歩きます。歩いていると、きれいに洗濯された制服を着た小学生たちが後ろからどんどん私を抜いて行くのに気づきました。運動能力には自信があるつもりでしたが、そこで生きる

人々の強さに圧倒された形でした。聞けばこの泥道を片道一時間かけて毎日歩いているとのこと。

思えば初め「汚れないことを第一に考えながら」長靴で歩いていたのは「文明に慣れてしまった先進国の常識」を常に身にまとっていたのであって、私は裸足になって初めて「目的地に向かうということ」と「けがをしないように歩くこと」に自分の意識と神経と筋肉を使うという「生きる行動」を開始したように感じます。

このように今までも多くのことを経験し、学んできましたが、これからはますます「先進国の人間の使命」を模索し、モニタリングの職務を全うしていきたいと思います。

海上輸送大作戦

AMDA ニアス 宇佐美 直人

ロジスティクス担当の役割

津波に続く去年3月の大地震で1万以上の家屋が倒壊したインドネシア・ニアス島で、AMDAはシェルター（簡易家屋）建設を行っています。今事業の困難の一つは物資搬送（ロジスティクス）の難しさにあります。地震で橋は陥落し、もともと悪かった道路状態はさらに悪化し、トラックはおろか歩いてもなかなか到達できない遠隔地の集落が多くあります。我々の事業地6集落のうち3つが陸上輸送がほぼ不可能で、海上交通以外に選択肢が無い状況です。しかも村から近い海岸は非常な遠浅で、大きな船は近づけません。しかしシェルター1戸分で木材5トン、セメント1.3トン、コンクリート基礎工事用の砂利の類18トンを砂浜から運び込まなければなりません。

海上輸送作戦

港湾施設の無い浅い海岸、砂浜での陸揚げにはランディング・クラフト（LCT-上陸用舟艇）が必要といわれ、東ティモールでも活躍したと聞いています。その種の船は現在、スマトラ島のバンダ・アチェに集結中で、当地へWFP（国連世界食糧計画）、UNJLC（国連ジョイント・ロジスティクス・センター）、IOM（国際移住機構）、アトラス・ロジスティクス（ロジを専門とするNGO）などの担当者に会いに行きました。初期調査では我が事業地の遠浅の海岸に接岸するには容量100トン以下のLCTでなくては、ということでしたが、見つかったものは最小で300トンでした。



小規模LCT、バージ

国際機関や何人かの華僑ビジネスマンにも当たってみました。適切なLCTが見つかったとしても係留地がジャカルタやシンガポールで、ニアスに来るのに1週間かかり、係留してある港から離れたその日から借り賃は1日当たり3,000ドルかかるといえます。これは無理です。しかし、あるロジの専門家からLCTが無くてはバージと言われるタグボートで牽引する平底船なら同じ役目が果たせると聞きました。するとスタッフがニアスの対岸にあるスマトラ島のシボルガという市に巨大な製材所があり、その種の船を大量に所有しているという情報を入手してきました。シボルガなら船で10時間です。実際に行って製材所の船着場を歩いてみるとあるわあるわ…大小さまざまなバージが。すると「あれ？」小さなLCTがあるではありませんか。会社の人に聞いてみると故障中で何年も使っていないという。容量は26トンで5トン・トラック1台が乗る、60センチの水深まで行けるから接岸できない海岸は無い…素晴らしい！

WFP-SS

（国連世界食糧計画一船舶輸送サービス）

会社幹部に会うと好意的でした。結局バージは保険、デッキ上のトラック固定の難しさがあるため、26トンLCTを修理、借り上げの方向で話がまとまりそうでした。この話をWFP-SSに相談すると、WFP-SSがそのLCTを借り上げて、我々に（無償）貸与できる可能性もある、という返事。他のNGOか



らの需要もあるからです。同時に現在WFP-SSが現在保有する300トンLCT（名前は「ハニー」）も同時に使えないか、事業地の海岸線水深調査をして欲しいということでした。



3mの竹の棒（水深用）に目盛と石の重りをつけ、100mのひも（距離測定用）をくりつけた手製の測定器とGPS（地球測位システム）を持ち、借り上げた漁船（AMDA丸5トン）に乗って事業地に近い海岸に出かけました。WFP-SSの300トンLCTは船尾が2.2mの水深地点まで航行可能で、船体が58mあるので、水深2.2mの地点が海岸線から58m以下なら接岸できるという理屈です。すると3つの事業村海岸のうち2つでは遠浅であるにもかかわらず、深い地点があって、300トンLCTが接岸できるポイントがあることがわかりました。沖合いの危険な浅瀬も環礁も無いようです。浅すぎる海岸線を持つ村でも干潮時に海岸づたいで別の事業地の海岸から4輪駆動車で物資が運べそうなことも判りました。

300トンLCT「ハニー」、26トンLCT、AMDA丸、自家製簡易栈橋の組み合わせで、海岸に物資を揚陸するというプランが現実味を帯びてきました。うまく行けば3週間後からセメント用の砂利搬送が始まります。しかし海岸からどうやって数キロ内陸の村へ運ぶのか？ココナツの木橋を架け、道を作り、一輪車かトラクターかロバで…

ロジ担当者の眠れぬ夜は続きます。

現地スタッフに仕事を任せる

AMDAニアス 林 朋宏

数百軒の簡易家屋建設を目的とするニアス事業には、ダイナミックな仕事がたくさんあります。それを担うのが、対象村に泊り込んで村民の組織化や村の大工の技術研修を実施するコミュニティ部門、さまざまな輸送手段を駆使して困難な地域まで資材を運ぶロジスティック部門、ニアス島各地に赴きUNHCRが調達する大量の木材の使用状況を監査するモニタリング部門です。

そんな中、私は日々の車の手配や物資の購入といったアドミニストレーション部門の総務を担当していました。しかし、とりあえずの大きな物資調達も終わり、事務所の仕事環境も整ってきた時点で、村での資材管理というコ

ミュニティ部門でこれから必要となる仕事を担当することになりました。そこで、それまで総務として一緒に働いていた若い現地スタッフに仕事を任せ、いく必要が出てきました。

その際に私が心がけたことがいくつかあります。まず、任せたい仕事の意義を理解してもらうようにします。それによって、その仕事に対する動機付けにもなりますし、普段と違った状況が発生しても大きな判断ミスをするものがなくなります。そのためには、その仕事のプロジェクト全体の中での位置付けを示す必要があります。

そして、期待をかけ、肯定的な評価を積極的に与えることで、スタッフがやる気と自信を持って仕事に当たれる

ように努めます。時には、成果に対する報酬をより明確に意識させることで、更にやる気を起こさせます。報酬というのは、給料アップには限界があるので、どれほど対象村民に喜ばれているか、どれだけ同僚スタッフの役に立っているかということを積極的に意識してもらうようにするのです。

また、普段からスタッフと仕事やプロジェクトに関するアイデア交流を行うことで、能動的に考える態度を培っておくとともに、自分やプロジェクトの考え方を伝えておきます。

それにより、プロジェクトの趣旨に沿ったより創造的な仕事を期待することができます。

しかし、これらのことを伝えるのは現地語がそこまでできない身にはなかなか難しく、また振り返って自分の未熟さを実感することも多く、悪戦苦闘の毎日です。



村民への技術研修を兼ねたモデルシェルター（簡易家屋）の建設



コミュニティで仕事をする事の醍醐味

AMDA ニアス 出水 幸司

“Koji, he finally made it. (彼が遂にやったよ!)” ありきたりのこの言葉がニアス島で実施されている家屋復興プロジェクトにおいて、Community Mobilization Officerとして活動に参加している私に2つの大きな醍醐味を感じさせてくれます。

私は去年の10月より、ニアス島で実施されているコミュニティ復興プロジェクトにおいて、6つの集落(3つの村から構成される)で家屋破壊被害を被った家族を対象に被災家屋の復旧を目的とした、コミュニティ復興サポート活動(プロジェクトはモニタリング活動とこの復興サポート活動の2つから構成される)に参加しています。

復興サポート活動の大きな特徴は、コミュニティが中心となり被害者とご近所さん自らの働きにより、地震災害からコミュニティ復興を目指すというポリシーを掲げていることです。このプロジェクトポリシーから復興サポート活動は、完成した家屋を被災者へ供給してまわるといった活動ではなく、AMDAのテクニカルチームのサポートのもと、UNHCRから支給された資材を使い村人自らが新家屋を建設、または破損箇所を修復するという、コミュニティが主役となり復旧活動を進めていきます。

現在、国際支援活動において問題視されている「地元住民不参加の援助活動」、「コミュニティの向上意欲をなくしてしまう一方通行(コミュニティを受身一辺倒にさせてしまう)の支援」等を考えると、このプロジェクトが掲げる支援ポリシーは、コミュニティの発展が一時的なものではなく、未来へつながるであろう、とても意義あるものだと思っております。しかしながら、活動を進めていくにあたってはとても高いハードルをいくつも乗り越えなければならず、我々の活動を容易に進めさせてはくれません。

“Koji, he finally made it.” 容易に進まない活動の中で、このありきたりの言葉が私に明日のエネルギーを与えて

くれます。

醍醐味その1 ついにやり遂げた!

乗り越え困難なハードルの一つに、コミュニティが主役がために生じる問題があります。被災家屋復旧活動の主役を務める村人の多くは漁師です。生活の生業を漁業で成り立たせている彼らにとっては、天気の良い日は絶対



村人との度重なる集会



村人によるコミュニティ復興を目指す

の稼ぎ時!朝早くから漁に出、ある程度の漁獲があるまでは帰ってきません。そんな彼らが一同に集まることはとても困難なことです。しかし彼らが主役である限りDecision Makerは彼らです。小グループの集会を何回も開き、まとめ役が意見の取りまとめに奔走する。このようなプロセスの中では、日本社会において1日でクリアできる課題が1週間も2週間もかかってしまい、被災家屋復旧活動はなかなか前へ進みません。

こんな状況の中、“Koji, he finally made it.”と、AMDA地元スタッフが村

人とともに一つの課題をクリアしたことを報告してくれる声は何ともいえない達成感を私に抱かせてくれます。「よし、明日もやるか!」そう思わせてくれる瞬間です。

醍醐味その2

また一回り大きくなったな!

被災家屋復旧活動において、主役であるコミュニティを支える脇役としてコミュニティ復興サポートユニットは地元ニアス島出身の5人の若者から構成されています。平均年齢若干24歳というこの若いチームは、若さから湧き出る情熱を持って、コミュニティの良きパートナーとして毎日村を駆け回ってくれています。

ただ、このチームは若さゆえに仕事経験も少ないため、課題クリアのためのプロセスを1人では計画しきれないために1対1のMeetingを設け、どのようなプロセスで課題をクリアしていくのかを1から10まで説明・指示しなければなりません。同じ事を何回も言う。なかなか骨が折れます。しかし、本当に頭を悩まされている事は、課題クリアのために全てのお膳立てをしたにも拘らず(こちらの伝達方法の拙さを改善する必要もあるのですが...)日々の課題をスケジュール通りに進められないことです。彼らなりに懸命にやっていることは分かっているのですが、ついつい大きな声を張り上げてしまいます。地元スタッフも私もまだまだ発展途上です。

そんな彼らが“Koji, he finally made it.”と昨日声を張り上げられた仲間の成果を報告してくれたとき、「また一回り大きくなったな!」と自分の事のように嬉しくなります。地元の若者のサポートによって地元コミュニティが復興していくだけでなく、彼ら自身がAMDAでの活動を通し成長していく。将来、村の、地域の、国のリーダーになろう若者達が成長していく様を目の前で見ると。国際貢献活動においてこれ以上の醍醐味はありません。

UNHCR 「e-Centre」における 緊急事態管理研修に参加して

AMDA ニアス 潮田 裕美

インドネシアのニアス島における緊急簡易家屋復興支援事業で会計業務を担当しています。昨年11月より本事業に携わっておりますが、今回はそれに先立って参加したUNHCR e-Centre主催「人道支援介入に係る緊急事態基礎管理研修 (Emergency Management Training Programme Workshop on the basics of international humanitarian response)」について報告させていただきます。

トレーニング内容

トレーニング期間は10日間でした。外国からの参加者の利便性も考慮され、場所は成田空港に近いホテルで行われました。参加者は31名で約半分が日本から、他はオーストラリア、モンゴル、タイ、カンボジア、アフガニスタン、中国、シンガポール、アメリカからの参加で、所属先は大きく3つに分類でき、政府機関、国際機関、NGOでした。

主な研修内容は、緊急救援時に業務命令を受けた際の準備（任務把握や携行備品調達など）に始まり、現地空港税関での対応、難民キャンプにおける各アクターの活動、実際に現地地で利用する無線機の使用法、四輪駆動車による悪路運転、個人の安全確保・緊急時の対応、難民発生時の支援体制構築に至るまで、包括的に理解することでした。実地訓練やシミュレーションを通すことで、体験したことのない難民に対する緊急救援、支援活動をリアルに感じることができ、これらの問題を「解決しなければ」という意識を強く持つことが出来たように思います。以下、研修中に最もリアリティを感じたシミュレーションについて述べたいと思います。

難民発生・支援対応シミュレーション

難民キャンプの様子を体感し、どのようなこと・モノがその場において必要であるのかを把握するため、トレーニングの早い段階で難民キャンプの様子をシミュレーションする

時間がありました。このシミュレーションでは、参加者一人一人が何らかの役割を演じ、それぞれが「共通の目的」に向けて行動します。つまり難民役の人は難民として、難民受入国政府の担当官や国際機関の職員はその担当者の立場になって、あるいは難民受入国の国民として、「共通の目的」つまり「難民問題を解決する」ために行動するのです。シミュレーションは6ヶ月の想定で、1時間が1ヶ月に設定されました。つまり1ヶ月で行いたい活動は1時間で終わらせなければなりません。1週間が約15分、1日は2分です。

私はこのシミュレーションで難民受入国の政府組織の職員役となり、難民に物資を配給したり、必要な物資を上級機関に要望したり、難民キャンプの状況を把握するなど、難民と直接対話する前線での活動を体験しました。実際の物理的アクセスの不便さをも真似るため、難民キャンプはホテルの一室、政府や国際機関の事務所は会議室が割り当てられ、私はそれぞれ別の棟にある「事務所」と「キャンプ」を何回も走って往復しました。難民キャンプへの配給は当然キャンプを訪ねなければならず、物資の調達が遅れ、食糧や医薬品の配給が2分、つまり1日遅れたら、難民が何人も死ぬ計算です。だから物資がたとえ必要とされる数に満たなかったとしても、手に入ればキャンプを訪れるようになりました。しかし訪れた先で、新たにまた難民が何百人増えたと聞かされます。難民を助きたい、増えた難民の分も物資を調達したい、時間はない、やっと物資が来た、でも足りない、何回も往復するので疲れは蓄積されていきました。恐らく、実際の状況にある程度近い精神状態も感じる事が出来たのではないかと思います。現実の活動では、本当にこのシミュレーションのような時間・物事の推移で動いていくそうです。「6ヶ月」に及ぶ難民キャンプの任務は終了しました。しかし、その間に何百人もの難民が命を落としたことになりました。

「緊急性」の実感

このシミュレーションを通して最も強く感じたことの一つは、「緊急性」です。物資の調達に道路状況、安全の確保、質・量の問題で思うように進まない間に、難民は増え続け、少しでも気を緩めると問題はみるみるうちに手がつけられないほど大きくなり、被害が多大・深刻なものになっていくのを、目の当たりにした気がします。この「緊急性」(の実感)は、これまで中・長期の開発支援活動しか経験のない私にとって、大きな収穫でした。開発支援に関する問題と、難民発生の問題を単純に比べることは出来ませんが、後者の方が、速やかに、かつ的確に解決することが求められると感じました。それは、状況の変化が激しく、それに対応が追いつかない場合の問題の悪化スピードが非常に速いからです。やり直しがきかない、それは大きな恐怖でもあります。

様々なアクターによる 様々なレベルでの支援

シミュレーションでは、私のように難民と直に接する役もあれば、受入国の中央政府の職員や国際機関の職員の役もありました。私は、難民の状況把握と物資の配給に追われ、つまり目先の事態を解決することしか見えていませんでしたが、その物資調達のために、たとえば受入国の現地政府機関の責任者ができる/すべきこと、受入国中央政府ができる/すべきこと、国際機関/ができる/すべきことがそれぞれあり、それらがすべて上手く動いて、ようやく難民に支援が届くことを改めて認識しました。たとえば国際機関のように、難民という対象者からはより遠い位置にいるアクターであっても、そのレベルにしか出来ない支援があります。今後はそのことを意識して、より広い範囲、レベルで、支援活動を考えていくようにしたいと思いました。

ニアス事業への応用

以上、本トレーニングで感じたことの一部を述べましたが、最後に、このトレーニングが現在携わっている簡易家屋復興支援事業でどのように役立っているかについて述べ、報告の終わりとさせていただきます。

本事業は、地震による被災者を支援

するための事業です。したがって、トレーニングで題材にされた難民への対応とは異なりますが、その中で最も役に立っていると思うのは、UNHCRをはじめ、他の多くの組織との折衝だと思っています。上述した、様々なレベルにおける「共通の目的」への行動を、お互いに意識、理解し、またその上で新たな支援活動を構築していくことが、目的達成を早く実現する姿勢であると考

えます。

今回のトレーニングでは、「難民発生」という事態が、自分にとってかなり特殊であることを実感し、ゆえに、日頃の訓練や準備がいかに重要かを認識しました。今後もこのような機会に恵まれたらぜひ参加し、トレーニングの成果を実際の業務に結び付け活かしていきたいと思っています。

インドネシアでのプロジェクトⅡ

スマトラ沖地震・津波復興支援から医療和平プロジェクトへ

インドネシア・バンダアチェにおいてスマトラ沖地震・津波被災者への緊急救援活動(2004年12月～)を終了したAMDAは、2005年3月より復興支援活動へと支援内容を移行しました。

復興支援活動

- 1) 仮設診療所・巡回診療: AMDA本部とAMDAインドネシア支部による診療活動
- 2) 医療知識教育: 地域リーダーや母親たちを対象に、薬の種類や飲み方の説明と病気の知識や予防法等の説明
- 3) 心のケアのためのソーシャル・アクティビティ: 避難所での移動図書館、創作教室(作文・絵画)、保健衛生・栄養教室
- 4) 医療行政機関支援: 医療スタッフへの医療機関緊急時対応研修、救急医療資格取得研修
- 5) 病院支援: アチェ州ザイナルアビディン病院での麻酔医・看護師への専門トレーニング
- 6) 医学生及び小・中・高等学校支援: 救急医療研修、公衆衛生研修、これらの研修を受けた医学生による小・中・高等学校での訪問教室(防災訓練・救急処置・公衆衛生)

2005年8月15日のインドネシア政府と独立アチェ運動: GAMとの間の和平合意を受けて、津波の被害とともに長年にわたる紛争の被災地となってきた南アチェ県と東アチェ県において、2006年1月よりAMDAでは4番目となる医療和平プロジェクトを開始しました。

医療和平プロジェクト

- 1) 健康平和教育: バンダアチェ同様に移動図書館、保健衛生教育、紛争の被害者となった子ども達の心のケアを目的とした平和教育プログラムを実施
- 2) AMDA Peace Community Center: 上記健康平和教育と並行して、巡回診療を実施する拠点となるコミュニティセンターを設置

南アチェ県、東アチェ県ともに被害が大きく、国内避難民となった人数の多い地域を6村ずつを選定し、コミュニティレベルでの平和構築に参画していきます。AMDAスタッフは現地スタッフも含め、専門家による心のケアと平和教育に取り組むためのソーシャル・ケア トレーニングを受講しました。

↓ 医療和平プロジェクトを開始する村のようす



ハサヌディン大学医学部創立 50 周年に参加して

AMDA ニアス 鈴木 俊介

先々月末、1月27日の夕方から29日までの間、菅波理事長の代理として、インドネシアのマッカサル市にあるハサヌディン大学・医学部創立50周年の記念行事に参加させて頂いた。そこでは様々な同窓イベントが開催されており、日本から訪れた私の心を和ませてくれた。

同大医学部とAMDAは長年友好関係にあり、昨年3月、パートナーシップを確固にするべく提携書(MOU: Memorandum of Understanding)を交換した。バンダ・アチェにおける津波直後の救援活動の際、同大学の医師やAMSA(アジア医学生連絡協議会)のメンバーでもある同大医学生が、寝食をともにして医療支援活動に参加した。そのうちの数名は今もスタッフとして活躍してくれている。一方ニアス事業でも、同大医学部の卒業生が(運営管理能力の高さを買われて)幹部スタッフとして活躍してくれている。事業活動を通じてパートナーシップが結ばれるこうした一連のプロセスは、まさにAMDAのスローガンである「A Global Network of Partnership for

Peace through Project with Sogo-fujo Spirit under Local Initiative」が具現化されたものであると言える。

さて、今回の種々の同窓イベントでは、同窓生の晴れやかな笑顔と、同大学の卒業生であることへの誇りが印象に残った。晴れやかな笑顔は、現役で働き盛りの年齢から定年を迎えた年齢の卒業生を、大学側が相違なく温かく迎え、おもてなしの心をふんだんにかもし出していたからに違いない。そこには「私(母校)はあなたのことを覚えていますよ。」という隠されたメッセージが伝わっていたのではないと思う。そして彼らの誇りは、医療の各分野で活躍する同窓の仲間達に出会い、語り合うことから感じたのだろうと思う一方で、今回のこうした同窓イベントを企画し実行したのが、紛れもなく同窓生自身であったことから来ているのではないとも考えられる。余興で歌や演奏のステージなどもあったが、その多くは同窓生自身のパフォーマンスであった。同窓会がいかに大学のプログラムを支えることができるのかを話し合う席では、彼らの真剣な議

論がとても印象的であった。大学側から「あなた(同窓生)達の力を必要としていますよ」というメッセージが伝わったに違いない。また、医学界で功績を残した卒業生や同大学への貢献が顕著であった卒業生には、表彰状や記念品の贈呈などもあった。「母校はあなた(の活動)に関心を持っていますよ」というメッセージが伝わったのではないだろうか。

卒業生は各年100名程度であると聞く。従って、50年を迎えた同学部の卒業生は5千人に満たない。そうした少数先鋭の教育システムだから成せる技なのかも知れないが、アットホームな同窓会を間近に見て、私のように日本のマス大学を卒業したものにとって、大学教育はどうあるべきかを考えさせられた3日間でもあった。

最後に一つ付け加えさせて頂きたい、この一連の同窓イベントの実行委員長が、AMDAインドネシア支部長のフスニ・タンラ教授であったことを。イベント終了後、ゆっくりと休養できたことをお祈りしたい。



同窓生による歌と踊りのパフォーマンス
医師によるジャズパフォーマンス



五〇周年は2度目の卒業式?
祝辞を述べる筆者



伝えていくこと

—桜が丘西四丁目町内会—

今年も桜が丘西四丁目ふれあい祭りに参加しました。AMDAをご支援いただくのはこれで3年目になります。AMDAと活動とともにされた経験もあるR&Bの片岡さんが新会長となられ、去年、おととしとお世話になった懐かしいお顔にもまた会えました。



今年も顧問の寺下さんがたくさんの竹製のけんだまを用意して待っていてくださいました。紙鉄砲を作るための二種類の太さの竹も用意してあります。子どもたちと一緒に作ろうという

のです。作業台も手作りで、竹のサイズや子どもの大きさに合わせて作業がしやすいように、可動式になっています。小さい子どもたちは手際良く竹を切る寺下さんの手元をじっと見つめています。もう少し大きな子どもたちは、自分で手を出し、要領を覚えると、威勢の良い音をさせて盛んに紙玉を飛ばしています。けんだまを一番喜んだのはもう少し(かなり)大きな大人だったような気がします。

最初にお話しをいただいたとき、地元岡山にあるAMDAの活動を、この桜が丘の子どもたちに伝えたいから、と言われました。その宿題は残念ながらまだできていません。小さい子どもたちと、親御さんたちに展示したパネルをなかなかご覧いただけないのがもどかしく、まだまだ工夫が必要と感じました。その中で、募金をしてくれた一団の男の子たちが、手渡したパンフレ



ットをベンチに腰掛けて読んでくれ、手渡せなかった子は改めて取りに来てくれて一緒に読むということがあります。どんなコミュニティも、変わっていきます。その中で、どうやって伝えていくか、それはやはり伝える側の努力にかかっていると思うのです。

今AMDAの事務所では、事務作業の合い間、時おり職員がけんだまをする姿が見られます。輪投げは希望者が多く、花器として共有することにしました。

当日、また準備から募金、民芸品の購入とさまざまな形でご支援くださったみなさん、本当にありがとうございました。

2005年10月記

(文責 富岡 洋子)

ワン・ワールド・フェスティバルに参加して

● 梶田 未央

昨年に引き続き今年も、2月4、5日に大阪で開催されたワン・ワールド・フェスティバルに参加しました。

「見て、聞いて、体験して、理解する、国際協力のお祭り」というコンセプトの下、たくさんの団体がそれぞれ趣向を凝らしたブースやプログラムを企画していました。

また、屋外テントでは各国料理の屋台がいくつも並び、雪のちらつく寒い日にもかかわらず多くの人で賑わっていました。

肉まんを蒸す蒸籠から湯気が上がり、ネパールカレーがおいしそうな匂いを漂わせている中、それらの強豪を押しつけて長蛇の列ができていたのは、店頭でぐるぐる回りながら焼かれている大きなドネルケバブが印象的な屋台でした。

そんな活気あふれる会場で、AMDAは活動紹介ブースの出展とミャンマー事業の報告会を行ないました。

2月4日(土)、5日(日)
両日ともAMDA活動紹介ブースを出展
5日(日)12時~14時
ミャンマー事業活動報告会の実施



ブースでは活動写真パネルや資料を展示してAMDAの活動を紹介しました。また、ミャンマー産のパールプレスレットやスーダンの木製枕、ネパール産のストールなど各事業地から集めた様々な雑貨も販売し、たくさんのお客さんで賑わいました。そんな中、ご婦人方には「これなんぼ?高いわまけてえや」と言われ、ある男性のお客さんには「真珠が本物か確かめたいか

ら、ナイフで引っかいてみても良い?」と聞かれ、ボランティアさん達と一緒にあたふたしながら対応することに…こんなコミュニケーションを楽しみながら…。

また、ミャンマー事業活動報告会には学生さんから年配の方まで幅広い年代の方に来ていただき、文化や生活習慣、道路事情といったミャンマーを身近に感じてもらえる話を交えながら母と子のプライマリーヘルスケアプロジェクトやマイクロクレジットプロジェクトなど事業の紹介をしていきました。

AMDAの事を知らない方も通りに立ち寄りてくれたりと、普段AMDAの活動を紹介できる事の少ない関西圏の方々に、活動を知ってもらう良い機会になったのではないかと思います。

AMDAでは15カ国で社会開発事業を継続しています。各事業担当者が帰国した際には、活動報告会を開催し、事業担当者の感想や意見を交えた事業紹介を行っています。通常、ホームページやAMDAジャーナルではお伝えできない担当者の生の声をお伝えしています。

2月1日(水)にスリランカの医療和平プロジェクト、インドネシア復興支援プロジェクト、そしてザンビアのコミュニティ農園プロジェクトの報告会を開催しましたので、概要を紹介します。



ザンビア 自立した開発ユニットに向けて

報告者 Virgil Hawkins

AMDAのザンビアでの活動は2つに分かれています。コミュニティ農園プロジェクトと結核対策プロジェクトです。首都ルサカ市のジョージ地区(人口約12万人)等において活動を行っています。

コミュニティ農園プロジェクト

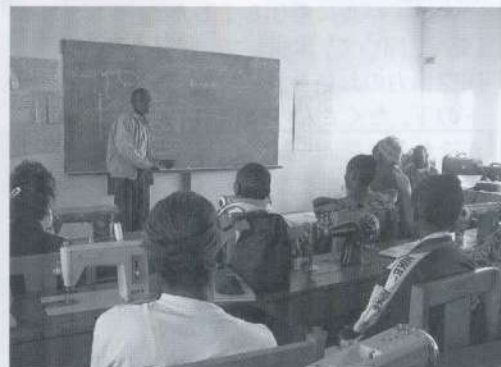
1998年、保健省から約3ヘクタールの土地を借り、住民の生活環境向上支援の一環として、コミュニティ農園プロジェクトを開始しました。住民ボランティアとともに土地を耕し、大豆を栽培し始めました。収穫した大豆は販売するとともに、栄養増進を目的に住民へも安価で提供し、大豆料理教室を



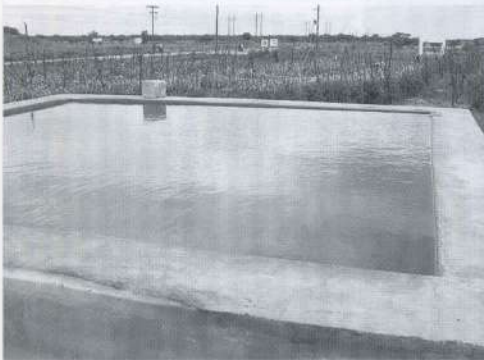
開催したり、栄養失調児、結核患者等への栄養給食としても提供しました。

2002年には農園内にコミュニティセンターを設置し、職業訓練(裁縫・識字教室)を開始。職業技術を身に付け、就業の機会を増やすことで貧困削減しようとするものです。また、何らかの事情で学校に通えない子ども達を対象に語学(英語・ナンジャ語)、算数、理科などの授業も行っています。このように農作物の販売等を中心としていたコミュニティセンターは、時にトレーニングセンターとして、時にコミュニティスクールとして多目的に使用されてきました。

2004年には灌漑設備や水道システムの導入等インフラ整備を実施しました。農園の収入向上を目指して、栽培野菜の種類も増やし、養鶏も開始しました。農園からの安定した収入が見込まれるようになり、利益は農園運営の他、トレーニングセンターやコミュニティスクールの運営資金としても活用できるようになりました。



目指すのは
ビジネスと開発を両立したユニット



2005年には2つの水道タンク設置に水道システムの改善や、養鶏所の増設、野菜(トマト、キャベツ、枝豆等)の収穫による収入の増加等、多くの成果がありました。しかしながら盗難等も相次ぎ、電気フェンスを農園周辺に設置するなど対策を施しました。

また、トレーニングセンターでの職業訓練にパソコン教室を加えるなどし、コミュニティスクールと共に生徒数も増やすことができましたが、職業訓練の結果としての就職へのつながりやコミュニティスクールの発展性には

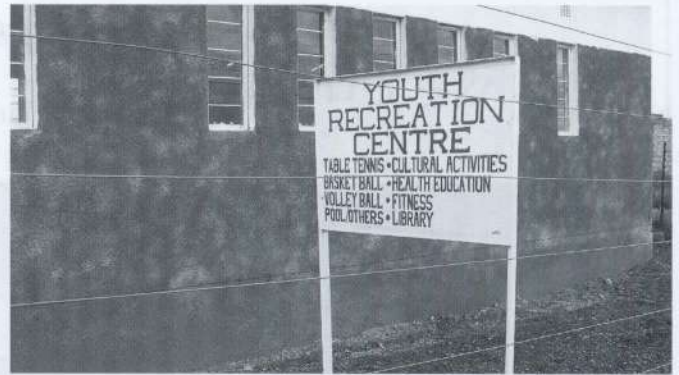


まだまだ問題が山積みです。また、農園内にユース・レクリエーションセンターを設置しました。

ユース・レクリエーションセンター

ルサカ市の貧しい地区内の娯楽施設といえば酒場やナイトクラブ程度しかなく、健全に楽しめる娯楽は全く見られません。これがザンビアで広がっているHIV/エイズ、アルコール、薬物、暴力などの問題の原因の一つだと考えられています。そこで、若者の娯楽の場を提供するためにユース・レクリエーションセンターを建設した。ここでの活動は、バスケットボール、卓球、ビリヤードなどのスポーツも含まれますが、その他に、保健教育、文化教室、図書コーナー、進路カウンセリングなどを通じて、包括的な若者の育成に貢献することに努めています。近所の若者の両親を中心に、センターの委員会を設立し、コミュニティが中心になりセンターの運営とあり方について考えています。

生活環境向上支援から始まったコミュニティ農園プロジェクトは、コミュニティセンターを中心にコミュニティ自立と発展をめざした大きな広がりを見せるようになりました。こうした包括的な開発事業が事業目標を達成する



ためには、まだまだ多くの問題を抱えています。一つのモデル作りになればと考えます。

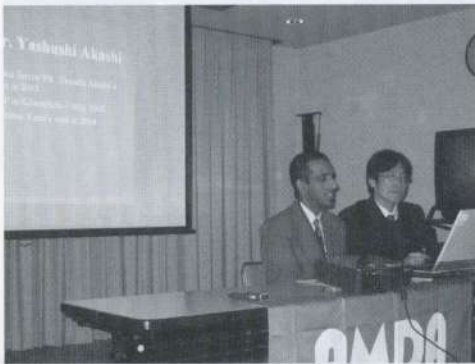
ザンビアにおけるもう一つのプロジェクト：結核対策プロジェクトを紹介します。

結核対策プロジェクト

ルサカの最も人口が多いカニヤマ地区とジョージ地区で結核患者を対象とした治療プログラム(DOTS = Directly Observed Treatment Short Course)を実施しています。各保健センターと協力しながら、それぞれの地区から結核治療サポーターを選出と育成をしています。研修を受けたサポーターは保健センターやAMDAが建設したヘルスポストなどを拠点に保健施設のスタッフと共に結核の治療と防止に努めています。また患者宅へ訪問し患者の服薬を確認しています。サポーターは、地域内に見られる結核に対する偏見を軽減し、感染を防止するために、劇・歌などを通じた啓蒙教育も行っています。将来はこのサポーターが組織的に独立した住民組織(CBO)として、結核と闘っていくことを目指しています。

スリランカ 医療和平プロジェクトの歩み

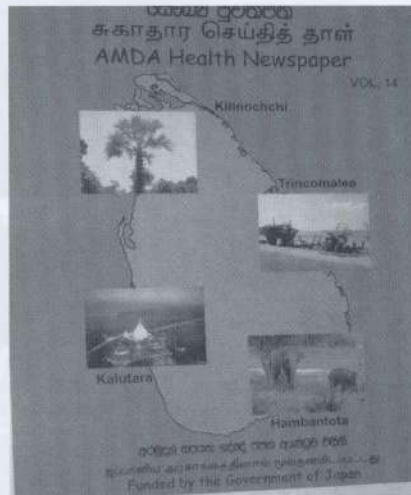
報告者 Veeravagu Nithiananthan



20年におよぶ内戦への停戦合意を受け、AMDAは2003年3月より、スリランカにおいて医療和平プロジェクトを開始しました。

医療和平プロジェクトはAMDAが提唱する、紛争当事者双方に公平に保健医療支援を行い、医療を通して平和構築に寄与することを目的とするプロジェクトです。アフガニスタンにおける北部同盟とタリバン間のワクチン停戦、コソボ紛争における難民支援時のアルバニア系とセルビア系住民への医療支援に次いでスリランカでは、北部反政府組織タミル・イーラム解放の虎：LTTE地域と南部シンハラ政府地域、そして東部イスラム地域の3地域で巡回診療と健康教育を実施するという3番目の医療和平プロジェクトを開始したのです。

巡回診療では銃弾の痕が残る公民館や学校の建物を借りて、診察と住民の健康診断を実施。カルテを作成し、巡回した際に多くの人々を能率的に診察できるように工夫しました。また、トラックをレントゲン検査可能な車に手直しし巡回レントゲン車として活用し



ています。

特に巡回診療地をはじめ地域の小学校を訪問しての健康教育は基礎的な保健衛生指導から病気予防法、栄養指導、さらには平和教育にまで及ぶ総合的な教育を行ってきました。

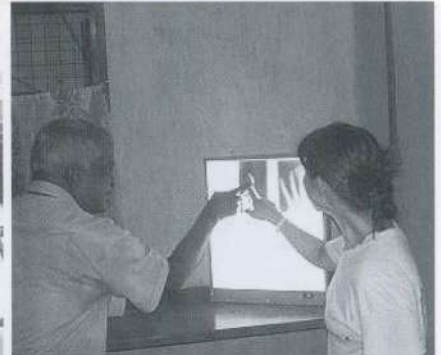
AMDAが発行する健康新聞にはシンハラ語、タミル語、英語の3言語表記で、保健衛生指導をテーマ別に記載し、最後には平和へのメッセージを絵や作文を交えて掲載し、小学校を中心に配布しました。AMDA健康新聞は小学校で健康教育の教科書ともなり、本来学校保健の存在しないスリランカの北部、東部、南部地域において、児童・生徒への健康教育に大きな効果を果たすこととなりました。さらに、3地域の子ども達は初めて交換会を行い、交流を深め合うことができました。

AMDAスタッフは手作りの教材をテーマ別に作成し、劇等も交えながら教育を行います。健康教育の成果は、児

童・生徒達の日常の学校生活の中に取り入れられ、手洗いやうがいをする子どもが増え、転んで擦り傷ができたときには水洗いをするなど、子ども達が健康教育を着実に身に付けてきていると感じられる姿がみられるようになりました。

3地域でのこうした地道な健康教育を行っていくなかで、2004年12月のスマトラ沖地震・津波被害に遭いました。AMDAでは活動地でもある地元(北部・キリノッチ県、北東部・トリンコマリ県、南部・カルタラ県)の保健行政局から依頼を受け、感染症予防のための保健衛生教育を開始しました。いままでの健康教育が今回の被災地での感染症予防にも有効であり、即実施できる団体と判断されたからでした。さらにLTTE地域ではLTTE側の保健行政機関と政府側の保健行政機関双方の活動許可が必要でしたが、今までの実績による双方との信頼関係の上には活動の拡張に問題は発生しませんでした。こうして被災者への緊急救援活動として、北部、北東部の全ての小学校と南部の全ての避難民キャンプにおいて感染症予防保健教育を実施しました。加えてソーシャルワーカーが被災した子ども達への心のケアに努めました。

AMDAは地元保健機関との連携により、上述のような健康教育法を地域の保健スタッフに伝えるため、人材育成プログラム(MOH Health Volunteer Training)を開始しました。地域保健・公衆衛生の現状を改善するためにも、地域保健スタッフのレベル向上



医療和平プロジェクト(巡回診療と健康教育)

ワウニア県基礎保健サービス復興支援プロジェクト

報告者 森 啓悦

私は、2005年7月中旬より1ヶ月間、インターンとしてワウニア県基礎保健サービス復興支援プロジェクトに参加させていただきました。

このプロジェクトは、JICA 草の根パートナー事業として、北部ワウニア県の母子保健分野の復興を目指して2004年5月より実施されています。プロジェクトの目標としては、施設や機材の不備、あるいは人材不足等によって、本来受けられる保健医療サービスへのアクセスが制限されている地域において、妊産婦や乳幼児への医療保健サービスを向上させることを掲げています。

AMDAは施設・機材の改善を目的とした産科病棟の建設と医療機材の整備、及び人材育成を目的とした医師・助産師・保健ボランティア対象のトレーニングを行っています。そして助産師、保健ボランティア相互の連携を図りつつ、地域保健衛生活動を強化しています。

産科病棟は2005年6月に診療所の敷地内に完成し、酸素吸入器や胎児心音測定器等の必要な機材が配置されました。人材育成は、知識・技術の向上のみならずスタッフ相互

の連携強化によって保健医療サービスの向上を持続的かつ自立的に行えることを目的としています。事前に行った地域女性を対象とした母子保健の知識に関する調査をもとに、まず、保健所や病院の医師とAMDAが協力して、母子保健の中心的役割を担う地域助産師を教育し、その教育を受けた助産師が



地域保健ボランティアを育成します。その後、助産師と保健ボランティアが協力し、地域の母親を対象に保健衛生指導を行う流れになっています。

保健ボランティアは、村人を対象に、環境衛生・家族計画・予防接種等の話を行い、健康に関する意識の向上を目指した健康教育活動を行っています。また、地域活動の一環として、助

産師・保健ボランティアが協力し、妊産婦や母子の栄養改善による低体重児や妊産婦死亡の予防のために、料理教室を実施しています。助産師は定期的に家庭訪問を行い、妊婦宅を中心とする村落の家々を訪れ、健康状態や生活環境等への助言を行っています。助産師の手の届かない地域では、保健ボランティアがその活動を代行しています。様々な研修事業の結果、健康診断(妊婦健診)や家庭訪問などを通して、疾病や危険度の高い妊娠の早期発見が可能となり、また、病院へのアクセス状況が悪く、住民の健康に関する知識が不足している地域において、住民の健康増進を促すことができました。

また、重要な活動の一つとして、助産師や保健ボランティアの間の会合が挙げられます。この会合を通じて情報の共有が行われ、これが、提供するサービスの質の維持につながっていると考えます。

最後になりますが、地域開発を通じた支援のあり方を経験する貴重な機会を与えて下さったAMDAの方々に深く感謝いたします。

は不可欠なのです。月に一度の保健所でのミーティングの際に、AMDAで作成したマニュアル等を使いトレーニングを行っています。また、保健衛生啓蒙ポスターを配布し、各自の活動場所で活用してもらうよう依頼していま

す。そして将来的にはAMDAが行っている健康教育を保健ボランティアが代わって行えるよう保健スタッフがまず学校保健や健康教育への理解を深め、さらに保健ボランティアに伝えていっ

て欲しいと願っています。保健ボランティア各自が学校保健の重要性、地域の健康教育の必要性を自覚してくれば、地域保健の向上にもつながり、AMDAの活動が受け継がれていくと確信しています。



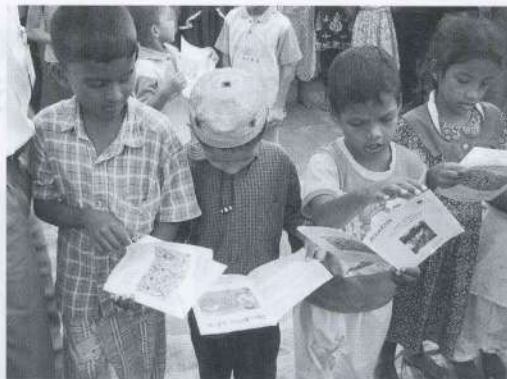
スマトラ沖地震・津波復興支援プロジェクト(感染症予防のための保健衛生教育と心のケア)

このスリランカでの医療和平プロジェクトは、RSK キャンペーン『救え！戦場の子どもたちⅢ』でもご支援を頂いています。昨年、このキャンペーンからのご支援により、現地での

1. 健康教育実施
(救急箱の配布及び医薬品の補充も含む)
2. 井戸の補修
3. 遊具の整備
を行うことができました。

ご支援者の皆様にあらためて御礼申し上げます。有難うございました。

今後もしもご支援をよろしくお願い致します。



“医療の国際化 - 少子高齢化に伴う外国人労働者急増の時代に備えて”

AMDA 国際医療情報センター設立 15 周年記念講演会のお知らせ

特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
理事長 小林 米幸

平素より AMDA 国際医療情報センターの活動に深いご理解と温かいご支援を賜りましてありがとうございます。

私どものセンターは1991年4月の設立以来、在日外国人を対象に無料で医療・医事電話相談事業を行っています。近年は外国人を受け入れる医療機関からの通訳依頼をはじめとする相談も激増しており、年間の相談件数も4,000件に及んでいます。少子高齢化の時代を迎え、外国人労働者の本格的受け入れが現実のものとして検討され始める社会情勢の中、外国人の患者さんが基本的な権利にのっとった医療を我が国で受けるには、外国人を積極的に診察する医療機関の存在が不可欠です。

このたび当センター設立15周年の記念事業として、これからの医療の現場を支えていくことになる医学部・看護学部の学生さんや、現在実際に外国人患者さんの受け入れ或いはサポートをされている方々に、母子保健・輸入感染症・エイズの3領域における専門家をお招きして、この問題の実情と実践をお伝えする機会としたいと思います。

開催日時

■ 2006年6月11日(日) 10:30~17:00 講演会

* 外国人医療総論 小林 米幸

(AMDA 国際医療情報センター理事長・小林国際クリニック院長)

* 本音と建て前の狭間で—外国人母子保健医療が提起するもの
中村 安秀先生

(大阪大学大学院人間科学研究科ボランティア人間科学講座国際協力論教授)

* わが国における外国人 HIV / AIDS 患者ケアの現状と課題

池田 和子先生

(国立国際医療センターエイズ治療・研究開発センター 患者支援調整官)

* トラベルメディスンと感染症の世界

濱田 篤郎先生

(労働者健康福祉機構・海外勤務健康管理センター所長代理)

■ 17:30~19:00 懇親会

開催場所：しんじゅく多文化共生プラザ 多目的スペース

新宿区歌舞伎町2-44-1 ハイジア 11F

(JR 新宿駅東口より徒歩 15分)

■ 参加費：1000円(資料代) 懇親会は別となります

■ 定員：50名(先着順に受付)

■ 主催：AMDA 国際医療情報センター・しんじゅく多文化共生プラザ

■ 申込・お問合せ先：AMDA 国際医療情報センター

センター東京事務局 03-5285-8086(担当 鈴木)

RSKキャンペーン



救え!戦場のこどもたちⅢ

協力
岡山県、岡山市、倉敷市
(財)福武文化振興財団

PEACE
for the children

入場無料

整理券が必要です

山陽放送 編成部
086-225-5731

2006

3/4

土

岡山シンフォニーホール

開場 14:00 開演 14:30

チャリティーコンサート



岩崎 光
(チェロ)



岩崎 淑
(ピアノ)



松本 和将
(ピアノ)



川島 基
(ピアノ)



小池 郁江
(フルート)



中島 良史
(指揮・編曲)



岡山フィルハーモニック管弦楽団

photo:高橋邦典
「戦争が終わっても」(ポブラ社)

2006

3/5

日

倉敷市芸文館

開場 14:00 開演 14:30

国際貢献シンポジウム

「いま、私たちにできること」&ミニコンサート

主催 ● 倉敷市 共催 ● (財)岡山県国際交流協会、ケアフレンズ岡山、山陽放送

基調講演



伊藤実佐子
国際交流基金



石井 正弘
岡山県知事

パネルディスカッション

沖垣 達
岡山県国際交流協会

村田みつお
カンボジアの村を
支援する会

原 憲一
元JNNカイロ支局長

コーディネーター
山下 晴海
前JNNカイロ支局長

ミニコンサート

2台ピアノ、
電子オルガン、打楽器アンサンブル



ニアス島緊急支援プロジェクト
家屋建設材料 (基礎工用セメント)
運搬作業



株式会社 道 徳 神
The Travelers Guardian Inc.

〒108-0014 東京都港区芝5-13-18 MTCビル9階
TEL : 03-3455-6111 FAX : 03-3455-2442
〒530-0001 大阪市北区梅田2-5-25 ハービスPLAZA3階
TEL : 06-6343-7725 FAX : 06-6343-6328
ホームページ : <http://www.dososhin.com>
メールアドレス : info@dososhin.com